
長い時が流れても

水上鈴（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長い時が流れても

【Nコード】

N9513T

【作者名】

みなかみれい
水上 鈴

【あらすじ】

最遊記二次創作。最遊記外伝から続く痛みで刻み、願いで綴る物語。

主人公はある日、封印から目覚めるとそこは「外伝」より五百年後の世界だった。いままでの形見と記憶以外をすべて捨てて新しく生きて行くことに決めた。

基本主人公は最強でチートですが、平和主義者なのであまり戦いません。後方支援専門です。基本的に毎週金曜日更新。タブンネ！！本編とは関係の無いifの短編をよく挟みます。ご注意。

序章 主人公の独白

夢をみた。

それはとてもなつかしい夢だった。

とてもとても、遠い昔の夢。

大切なひとたちとすごしたかけがえのないささやかな幸せのつまった日常。

少しのきっかけで壊れてしまった戻らないもの。

まるでピースのたりない歪んだパズルのよう。

かきあつめても、かきあつめてもももには戻らない。

知っていてもその影を追ってしまう自分に嫌気と絶望と虚無感を抱きながら。

手を伸ばしてもとどかなかったわけは自分が小さかったわけではない。

ただ、自分で解決できる規模ではなかったから。

けして自分が至らなかったからではない。

だけど・・・

この苦しみをかかえて生きて行くしかない。

最後に聞きたかった。

「あななたちは幸せでしたか？」と。

ああ、いつのまにか眠ってしまったようですな。

きれいな満月でしたからついつい見入ってしまいました。

もう清々しい朝です。

あの頃からずいぶん時が流れました。

私は第二の人生を歩んでいます。

それと、また大切なモノを見つけました。

ワタシは今、幸せです。

心に残ったキズと痛みはまだ消えてはいませんが。
むしろ痛みでワタシというものを心に刻んでいるような気がします。
それでも前を向いて生きています。
またいつか、あなたたちに逢える日まで。

キャラクター紹介（前書き）

簡単なネタバレを含まない紹介を。

キャラクター紹介

主人公

耀^{よう}、男。年齢はおそらく十二歳から十四歳程度。本人がおぼえていないため推定。

ふわふわした淡い金色の髪を鎖骨のあたりまで無造作に伸ばしている。

最近切ろうか伸ばして束ねようか迷っている。

光の当たりかたや角度によっては青や黒、瑠璃色などに見える紺色のまるっこいおおきな瞳。

子どもらしい無邪気な笑や大人っぽいひだまりのようにあたたかいほほえみをみせることもある。

服装なシンプルで飾り気のないおとなしいものが好みで、

白いカッターシャツに砂浜の砂の色のズボンや長く幅の広いストールと

大きなフード付きマントで日よけをしている。

形見の、一つ分が親指の爪二つ分くらいの珠の連なった108個の紺色の数珠を自身の命よりも

大事にされていて、ストールで隠している。どんなに信頼している仲間で触ることは許さないほど。

性格は礼儀正しく、紳士的で優しいがまだまだ大人に甘えたいさかり。

悟空に腹黒さを抜いたミニ八戒と言われる。

誰かに甘えることが下手でどう接すればいいのかわからずひとりで抱え込む事が多い。

霊山付近の深山幽谷の深い谷底の洞窟の奥の地底湖に氷漬けで五百年間封印されていた。

五百年前の事を覚えているが今は今だと割り切っているため話すことはなく、

五百年前の事は墓まで持っていくと誓った。

好きなもの、干しアンズ。嫌いな物、タバコなど。

第一刻 懐かしむころと今。

風に巻き上げられた木の葉が首にあたってわずかにみじろぐと、

鎖骨の位置よりも長くなった淡い金色の髪がさらりと流れた。

ああ、長くなりましたね。切ってしまいたいでしょうか、

それとももつと伸ばして束ねてしまいたいでしょうか。

少しだけ手にして見つめる。

ふと、昔のあの人の『きれいだから短くするなんてもったいない』
という言葉が蘇りました。

あの時ワタシは『あなたとおそろいだから伸ばして、あなたと同じ
にしたい』と言いました。

そういえばあのひともワタシと同じ金色の髪をしていましたね。

長くて指通りのいい髪で遊んで怒られていたのはいい思い出です。

それと、角度や光の当たりかたで蒼や黒、

夜空の色や瑠璃色に変わるワタシの紺色の瞳が好きだと言ってくれた
ことも忘れられません。

あの時にみんなでみた桜はいまでも咲いているのでしょうか。

そういえば、この街には桜の木はないですね。

一度でいいから満月の夜に桜を眺めてみたいものです。

足音がだんだん近づいてきています。あの足音はおそらく八戒さんでしょうね。

ドアを開けたらおかえりなさいって言いたいでしょうか。

「耀、どうしましたか？」

こんな時間まで考え事をしていたワタシを心配してくれました。

我に返るともう昼前から夕暮れ時になっていたみたいです。

「八戒さん、おかえりなさい。なんでもないですよ。

ただ、髪をどうしようか悩んでいただけです」

なにかをごまかしたような気がしたワタシは窓のサッシに座っていましたが、

飛び降りて八戒のとなりに椅子を持ってきて座ることにしました。

「ならいいんですよ」

心配性で優しいあなたが大好きです。

ですが、口にするのは恥ずかしくて抱きついてごまかしてしまいま

した。

素直になれないワタシを咎めず頭を撫でてくれる感触に身をゆだねることにしました。

第二刻 ささやかでちいさな幸せと平和を望むところ

「今日は珍しいですね。耀が甘えてくるのは」

やわらかい金色の髪を指ですきながら、

珍しく甘えてきた耀の頭を撫でる八戒は優しく笑った。

「大好きです。・・・おとうさん」

最後の『おとうさん』の部分はこっそりつぶやいて、

耀は頬を赤くして、

ずかしそうに八戒の脇腹に顔を押し付けるようにして隠してしまった。

「ありがとう。僕のところに来てくれて」

優しい時間はゆっくりと流れていく。

「夕食の準備、手伝いましょうか？」

「そうですね。おねがいします」

耀は椅子から飛び降りて台所に走った。

八戒は危ないと注意しつつもどこかうれしそうに言う。

その様子を物陰から悟浄が見ていた。

「親子・・・か」

息を深く吸い込んで、くわえていたタバコの紫煙を吐き出す。

タバコが苦手な耀のためにタバコを灰皿に押し付けて消してから部屋に入った。

「悟浄さん、おかえりなさい」

「おかえりなさい、悟浄」

「おうっ」

幸せはここにある。

だからなくさないようにしっかり持って離さないようにしよう。

短編 「三蔵さんといっしょ」 1 (前書き)

本編の進行と関係の無い短編です。

三蔵さんと主人公の耀ようとの旅の中でのヒトコマ。

短編 「三蔵さんといっしょ」 1

薄曇りの空はうつすらと茜色に染まる。その空間に会話はいまだなかった。

狭い部屋にベッドに陣取った三蔵はやることもなくただタバコをふかし、

タバコを大の苦手とする耀はいつもは首に巻く海岸の砂の色のストールで、

口と鼻を覆って紫煙を吸い込まないようにしながら

柔らかい布で大事にしている紺色の数珠を磨いていた。

「おい」

ちょうどケース吸いきった三蔵が

宿やのそなえつけのガラスの灰皿に最後の一本を押し付けて消した。

手元に新しいタバコもなく、

暇になった三蔵が熱心に数珠をみがいている耀に話しかけた。

「三蔵さん、どうしましたか？」

耀が手を止めて、数珠と同じ色の瞳が向かい側の三蔵をとらえる。

「いや・・・なんでもない」

意外と共通の話題もないことに今更気がついたのか、黙ってしまった。

会話の続かない三蔵を

少しだけ横目で見た耀が数珠みがきを終えて気晴らしにと外を見た。

外では夕立が降っていた。数珠を首にかけて、

タバコの残り香が消えたことお確認してストールをはずして首に巻き直した。

何かとても大きなことを成し遂げて疲れたと言わんばかりに耀は部屋に一つしかないベッドに倒れこんだ。

耀の数珠が気になった三蔵がこんなことを言った。

「おい、その首からさげてる数珠を貸せ」

『数珠』という言葉に異様に反応してうたたねしようとしていた耀が跳ね起きて

三蔵を疑うような目で見た。そして、貸そうか迷い少ししてから答えを出した。

「いいですよ。ただし・・・」

「ごちやごちやした御託はいい。さつさとよこせ」

「はい、わかりました。この人には勝てませんねえ」

しぶしぶと首にかけていた数珠を三蔵に渡した。

短編 「三蔵さんといっしょ」 1 (後書き)

授業中に書いたメモからちまちまと執筆。

短編 「三蔵さんといっしょ」 2 (前書き)

これでこのシリーズはおしまい。

短編 「三蔵さんといっしょ」 2

じつくりと数珠を手に持って観察する三蔵と、

彼の背後で数珠と同じ色の紺色の瞳で興味津々にみつめる耀^{よつ}。

「この数珠・・・材質は瑠璃か？・・・術を複数かけているな」

「うーむ・・・材質はわかりませんが、石ということだけはわかっています。」

それと、三蔵さんに術をかけていることを見破られるなんてワタシもまだまだですね」

背後にいた耀が椅子を引き寄せて三蔵の向かいに座る。

そして困ったように苦笑いして右手で右頬をかるく数回かく。

数珠の検分も飽きてしまったのか、あっさりものの数分で返された。

「きまぐれですねえ」

耀がまた先ほどとは違った意味のほろ苦い笑を浮かべて数珠を丁寧に首にかけて、

その上に長く薄いストールをゆったりと首にまいた。

それから、椅子を元の位置に戻してベッドに音とホコリもたてず倒

れ込んだ。

煙草の香りはもう消えていた。

「おい、茶」

「わかりました」

寝転んだのもつかの間、三蔵にお茶を要求されていた。

ついでだから自分のぶんもいれようと思いついて、

ふたり分の茶葉を急須にいれてお湯が沸騰するのを待つ。

ヤカンのお湯が沸騰するころは太陽が地平線の一端に接する頃だった。

お茶をそつとさし出して静かに二人で飲んだ。

耀が何かを言いかけたときに、買出しに行っていた八戒、悟浄、悟空が帰ってきた。

「ただいまー。さんぞー、はらへったー!」

「ちつ。うつせーぞ!ばかざる!」

「ただいま。耀、おみやげを買ってきましたよ」

「やつほー三ちゃん。どうよ?」

宿の部屋に戻るなりいつものように空腹を訴える悟空。

いつだって優しい八戒。

飄々として掴みどころがなさそうな悟浄。

「おかえりなさい、みなさん」

嗚呼、幸せで満ちていると耀は感じたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513t/>

長い時が流れても

2011年9月15日11時47分発行